月刊
立川と語ろう　立川に生きよう
えくてびあん
4
(EKUTEBIAN VOL.15 APRIL 1997 EKUTEBIAN)

宮城六郎と自然写真の会

ユリ科

白花のカタクリ 撮影：宮城六郎

9弁のカタクリ 撮影：宮城直子

多摩には、**カタクリ**の自生地がまだかなり残っている。これは、地上に顔を出している間が2か月しかないためで、このような花は、スプリング・エフェメラル（春の短い命）と呼ばれる。しかし、種子が発芽して花をつけるまでに7～8年程かかり、実のところたいへん長寿命の花なのである。

ごくまれに白い花の**カタクリ**も見られる。アルビノといわれ、出現する確率は数万分の1と推定される。

径5cmほどの6弁花は、多少細目に見える3枚が本来の花びらで、残りはがく片にあたる。根気よく探すと、6弁以外の花も見付かることがある。

こうした、変わり花に出会った時の嬉しさは、いうに言われぬものである。

白花のカタクリ

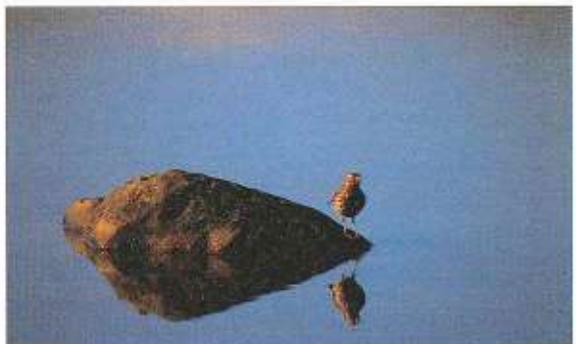
9弁のカタクリ

えくてびあんレポート

私の出逢った鳥たちの姿 そして鳥の言葉たち

水辺にたたずみながら、あるいは木の枝に休みながら。飛び立つ前のほんのひと時の静寂の中に、
鳥たちはいったい何を見ているのだろう。
高田二三夫氏（柴崎町）のレンズが撮らえる野鳥たちの姿は、一様に何かを語っているかに見える。
そのたたずまいは、詩人と呼ばれるヒトのそれに酷似しているように感じるのは気のせいか。
かつて人が鳥に話しかけ、話しかけられていた時代があったとしたら、私たちはいつからその言葉を忘れてしまったのだろう。
高田氏の視線に便乗し、しばし、その言葉を思い出してみたい。

アオサギ
多摩川・立日橋上流

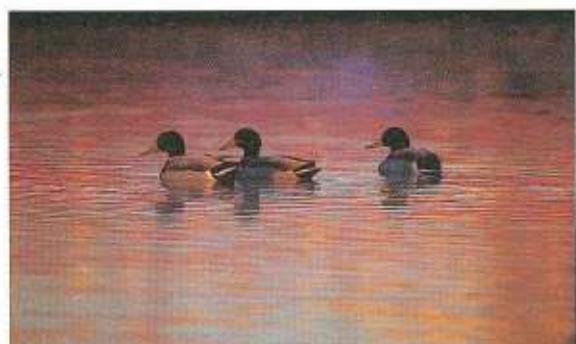
イソシギ
多摩川・拝島橋付近

タヒバリ
多摩川・日野橋上流

ダイサギ・コサギ・ユリカモメ
多摩川・浅川合流点

コサギの群れ
多摩川・浅川合流点

カワセミ
多摩川・日野橋上流

マヒワ
多摩川・立日橋上流

マガモ
多摩川・日野橋上流

撮影○高田二三夫

1946年生まれ。51才。20才の時、写真家・手島直利による"ウミネコ"の写真に感銘を受け、本格的な活動を始める。各地の景色を撮り続ける中で「自然の本当の美しさはその土地に住む者にしか知りえない」という考えに至り、以来、多摩川を中心とした自然の描写、特に鳥をテーマとした作品を撮り続けている。立川自然観察友の会会員。柴崎町5丁目在住。

シリーズ この人と1時間①

重からず、軽からず。描くべきは「強靱」な線

菊田臥龍さん ―書道家―

「字は人を語る」という言葉は、今、どれだけ有効なのだろうか。そう云えば、現在の日本人は正座して机に向かい、筆をもつということをしなくなった。文字の表情を隠すというよりも無視しているに近い。今年の1月から2月にかけて立川市中央図書館内において、わが街に住むある書道家の作品展『書は自然より肇む』が催された。整然と並ぶ書棚の間を縫うように展示された「文字」のインパクトに、本を探す人たちは皆、足を留めた。それはひとの描く文字が、何かを発しているということの証しであった。新シリーズ『この人と1時間』。第1回目は書道家・菊田臥龍さん（富士見町6丁目）にご登場いただいた。図書館を訪れる人々の足を留めた、その張本人である。

◆菊田臥龍（きくたがりょう）：本名・孝司。1948年函館生まれ。早稲田大学卒。出版社勤務を経て、1979年より日本書人連盟・事務局長として12年勤務。この間、会長・石田栖湖先生に多大な影響を受け、書を学ぶ。日本書人展・山崎大抱賞（81年）、桑原翠邦賞（88年）、比田井南谷賞（89年）の各賞授賞。無監査となる。日本書人連盟会員・木西会同人・五人展同人・臥龍窟主宰。富士見町6丁目在住。
◆立井啓介：月刊えくてびあん編集人

立井　さっきお宅を訪ねたら、いつも仕事場に居りますってこちらを教えてくださって。私、書道家のお部屋というのは初めて伺ったんですが、臥龍さん、ここでいつも過ごされてるわけですか。

菊田　ええ、メシを食う時以外はほとんどここにいます。風呂もあまり入らない（笑）。

立井　じゃあ四六時中ここで「書いて」ばかり?

菊田　いやいや。もちろん書くための空間ですけどね、ずるずるテレビなんか見て過ごすよりは、ここにいた方が愉しいというか。友だちがよく来るんですけど、ここの火鉢囲んで、魚焼いてね（笑）。お銚子置いて飲んだり。そんなことしてるんですよ。

立井　そもそも、臥龍さんと書との出会いはいつ頃なんですか。

菊田　親父が字をやっていたんですよ、僕がちっちゃい時に。

立井　お父さんもやっぱり書家だったんですか。

菊田　そうですね。最初は警察官だったんですけど、その時に始めて。その後は書道塾をやってて…。あの、北海道っていうのは書家が多かったんですよ。

立井　ああ、北海道ってそういう空気があるんですか。知らなかったなあ。

菊田　ええ。浩宮さまに教えてた桑原先生、終戦記念日に毎年武道館の慰霊碑を書かれている金子先生、それから僕の師匠だった石田栖湖先生も北海道。そういう形でずいぶん出ているものですから、父もそういう影響を受けてたんでしょうね。実際やったのは三十才を過ぎてからですけどね。

立井　私、習い事っていうのがカラッキシ苦手なんですが、三十を過ぎて習うっていうとどういう習い方をするもんなんですか。

菊田　例えばここにいろんな本がありますけれども、全部これ法帖（ほうじょう）なんです。それから拓本。古いものなんですけどね。普通はこれを先生が書いて、その字を習うわけですが、僕らの場合は先生の字は一切習わず、手引きだけをしてもらう。当然最初はこんなの見ても解るわけない。けど、書くうちにだんだん解ってくるんですよね。

立井　ああ、ただ習うんではなく「習い方」を習う。

菊田　そう。何が基本的なものか、そうでないものか。これをやってごらん、これを見てごらんとか。そうするのが先生なんですね。

立井　それは一般的にそういう教え方なんですか、この世界は。

菊田　いや、普通はやっぱり自分の字を習わせる方が楽なんじゃないですか。弟子が自分よりうまくなる事はないですから（笑）。僕の場合、よく師匠から言われたのは、こんな言い方はいけないのかもしれませんけど「乞食は罪にならないが泥棒は罪になる。しかし書の世界では、乞食は何の役にも立たない。もらってはいけない。自分で盗め」。

立井　あー、なるほどねえ。

菊田　よく写しちゃいけないって言いますよね。二度書きしちゃいけないとか、そういうのは全然ない。袋文字っていって手本にあて紙あててね、なぞってみたりとか。何でもやっちゃうんです。タブーはない、勉強には。それで自分のものになればいいんですから。死ぬまで袋文字じゃちょっとまずいですけど（笑）。結局、ある程度の年齢になって始めると、必ず癖がついてますよね。書の場合はまず、その癖を取るところから始まるんですよ。

立井　しかし、三十年書いていれば三十年の癖がついてるわけですから、それを取るとなると、こりゃかなりしぶといでしょう。

菊田　結局、手本を自分の方に引きつけるんではなく、自分から手本に近づくわけですから。当然それは、癖を取る事になるわけです。その上で自分の個性がでればいいわけですよね。

立井　今、個性のお話が出ましたけれど、どんな世界でも最初は、初心者は初心者の個性があるでしょう。でも、それが個性かというと実は違ってて、書においてもやっぱり何か本格的な個性ってのがあるんじゃないんですか?

菊田　僕らは、線質が全てを決定するという考えで勉強してますね。

立井　あ、線の質!

菊田　ええ、まず線質だという。重い線とか、軽い線とかありますけど、それはもうその方の持っているのが軽い線であれば、軽くても良いんですよ。

立井　軽さに徹して…。

菊田　いや、強靱な線ということですね。軽いけれども強靱だ、重いけれども強靱だ、強い線だということですね。軽くハッと飛んでいるようでも、その線の芯がピッと通ってて強い。それが一番基本だと思うんですね。

立井　ところで臥龍さんは〝若手〟ですか、それとももう〝長老〟ですか?

菊田　いや、それはド若手ですよ。

立井　ド若手（笑）。

菊田　書の世界では、六十七十はガキのうちっていいますからね。七十過ぎてから出来てくるっていう言い方をしますから。

立井　六十七十でガキのうちだとしたら、相当な道のりですねえ。

菊田　まあ、年をとっているから必ずしもいいって訳じゃないですけど。でも、そのぐらいにならないと書けないものなのかもしれませんねえ。でもそんな事言ってられませんから、いつ死ぬかわからないんだから（笑）。こっちはどんどん書いてますけれど。

立井　例えば小説家なんかだと、七十八十になって書ける人はそんなにいない。過去の作品があるから小説家でいられるんで。でも書道っていうのはある種、構築するエネルギーが要るでしょう?

菊田　まあ、エネルギーを使って書いてるうちはダメみたいですね。

立井　あ、エネルギー使ってちゃダメ?

菊田　ええ。僕、亡くなった石田先生からはよく「君の字は暑苦しい」って言われてたんです。暑苦しいってのは、つまり気持ちが強すぎて、見る人が息がつまるような感じなんじゃないんですかね。自分で自分の悪口を言うのもあんまり面白くないけど（笑）。中々直らないんですよ、10年以上も同じ事言われてましたね。

立井　う-ん、一種の「軽み」のようなものが出るといいってことでしょうか。

菊田　「軽み」というか、無駄な力が抜けるというんですか。肩の力を抜いて、うまく書こうと思わないっていうか。自然に、気持ちと筆とが一致する、と。そういうことだと思いますけどね。

立井　無駄な力を抜いて、しかも芯の通った強い線。

菊田　ええ。あの、書で上々のものは「イセンヒツゴ」っていうんですね。

立井　イセンヒツゴ?

菊田　そう。意識の意、それが先にあって筆は後についてくる。気持ちが先に動いて、それで後に筆がついてくるということです。変にうまい人は筆が先にいっちゃう。

立井　その「意」なんですけどね、どういう心持ちなんですか、書く時っていうのは。

菊田　ほんとに、できたなって思う時は何も考えてないですね。

立井　はははあ、そうすると意先筆後の「意先」も越えちゃうわけだ。

菊田　うーん、どうでしょうねえ。先生から褒められたことは滅多になかったんですけど、1回か2回「ま、こんなもんだろう」ってのが一番の褒め言葉でした（笑）。

立井　ああ、先生が「こんなもんだろう」という時は相当褒めてることなんですね（笑）。

菊田　だと思いますね（笑）。何十枚も書いて持っていくでしょ。それ見て「あーあ、これ汚さなかったらまた使えたのになあ」って、そういう言い方するんですよ（笑）。「君のは女郎の恋文だ」とかね。

立井　女郎の恋文！それはきつい（笑）。でも、一種の激励なんでしょ？先生からの。

菊田　激励にはとれなかった、あれは（笑）…。でも、いい先生でしたよ。師匠っていっても、僕、月謝払ったことないんですよ。手伝いに来いって言われて、逆にお金もらってましたから。

立井　あ、そうなんですか。

菊田　ええ。（日本書道）連盟で事務の仕事をやらせていただいてました。最初は弟子入りしようとして始めたんですけどね、馬鹿なこと言うなって。「君、弟子になったら僕に金払わなきゃならないんだぞ」ってね（笑）。先輩後輩でいこう、そういう付合いにしようっておっしゃったんでね。それで結局最後までそういう形だったんですけどね。

立井　普通の人は弟子を持ちたがるもんでしょう。それを「先輩後輩」ですか。

菊田　ええ。だから先生は僕のことを弟子だとは思ってなかったかもしれないですけど、僕はね、師匠は一人しかいないと思ってるんですね。

立井　その石田先生がつい先日なくなられたということですが、今後はどなたを師匠として勉強…。

菊田　いや、もういらないですね。

立井　師匠はいらない?

菊田　ええ、いらない。「書は習うもんじゃない」ってことを習いましたからね。

立井　習い方はもう習った、と。

菊田　そういうことですね（笑）。

真味百撰① スペイン料理 タパス

錦町2-2-29 Y's立川ビル1F　☎29-0733
18:00〜23:30／日曜定休

立川で唯一と云ってよいスペイン料理店。特にパエリア、生ハムがおすすめの絶品。

立川は専門店が育たない町とよく云われるが、そんなことはない。6年前に開店して着実に歩を進めているスペイン料理店・タパスが好例だ。シェフの豊泉辰雄さん（写真中央）は料理学校卒業後、欧風料理店で働き、スペイン料理の魅力にとりつかれて念願の専門店を出した。

開店当初はランチタイムにポピュラーな料理を700円前後で提供していたが、これはお客さんの底辺を拡げるため。現在では夕方6時から、習得した技術でお客さんの舌を堪能させている。

おすすめは、パエリアの3種（イカスミ、魚介類、きのことソーセージ）。それぞれ2〜3人前で2,500円だが、牛骨から時間をかけてとるダシ汁が豊泉さんの自慢とするところ。

スペイン風生ハムもまたタパスの自慢（900円）。少し珍しいところでは羊の脳みそのムニエル（1,150円）。表面はカリッとしていて口の中でとけるような逸品をスペイン産のワインやシェリー酒と共に味わうのも格別。

そのほか、日替りで味わえるタパス流のスペイン料理が愉しみの店。おおよその予算としては、一人3,000円前後というところだろうか。なお、今月からスペインの居酒屋のよさを取り入れて新局面を切り開きたいと意気込む豊泉さんだ。

東風

春は曙。この名フレーズをつくずく味わえる時季となった。だが春といっても案外に長く、変化に富んでいるものだ。3月の初旬くらいまで、春はもうすぐそこまで来ている、という風な文を新聞や雑誌で見かけたが、春は2月4日の「立春」にその幕を開けている。3月5日は「啓蟄」であった。下旬には桜がほころび、4月に入ると春は熟れてきて、むしろ晩春の色合いが濃い◆歳時記を眺めていたら「春の風邪」には他の季節の風邪とは違うニュアンスがあると書いてあった。冬の風邪と違って、それほど厳しくはなく、どこかゆったりとしている感じがある。暖かくなってきた日ざしのなかで情感があるという。高浜虚子の句に「病にも色あらば黄や春の風邪」とある。風邪に色を見出す民族がほかにいるだろうか◆同じ歳時記に「春愁」とある。明るくうきたつ春なのに、ふっと哀愁をおぼえることがある。はっきりとした憂鬱ではなく、あてどない物思いのような気持ちをいうとある。フランス語の「アンニュイ」とやや似ていようか◆春には亀が鳴くともいう。亀には声帯がないので鳴くことはありえないけれども、それでもかすかな声を出すという、人間側の感じ方からでた言葉であるにちがいない。そういえば、春の夕方など、どこからともなく何ともしれぬ声をかすかに聴いた覚えはないだろうか。日本人は春に特別な色を見出したり、声を聴いたりするらしいのだ。もし本当に亀が鳴くなら聴きとどめておきたい気もしてくる◆春の風邪　まぶたのうらの　えくてびあん

（編集）池田隆男　小林康史　鵜川 理　名尾恵真　山田恵子　松本わかこ　大須賀久典
（写真）天野武男　板橋一明　井上義治　スタジオ269　中村 伸　五来孝平

月刊えくてびあん　第153号
平成九年四月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5
杉田ビル6F　〒190
電話　〇四二五(28)〇〇八二
FAX　〇四二五(28)一二九七
編集発行人　立井啓介
印刷所　㈱大廣社

立川昆虫記 9

アブラムシに集まる虫たち

絵・文　中西　章（若葉町）

【天敵】

生物は皆、自分たちの命をねらう天敵を持っています。昆虫を例にとると、植物の汁だけを吸って生きる草食昆虫のアブラムシの天敵は次の通りです。肉食性昆虫のテントウムシ、クサカゲロウ、ヒラタアブ、カマキリ、寄生バチなどです。これらの昆虫も又、恐ろしい天敵を持ち、命をねらわれています。このように自然界は食うか食われるかの関係でなりたっているきびしい世界です。虫たちも、なるべく多くの種族を残そうとして、沢山の卵を生むのですが、親になるまでの間に天敵に食べられて、最後に残るのは、もとの親と同じ数の2匹ぐらいなのです。これは地球上の植物が限られた数しかないため、昆虫の増えすぎをコントロールしている自然の仕組みの不思議な所です。